

は其の70%は英國の利權に握られてゐるし、また世界の銅鑛は北米の利權に依り壓倒的に所有されてゐる。

更らに直接的であり且つ集中的支配の例としては、硝石は智利、加里は獨逸及び佛蘭西、錫は大英帝國、ニッケルは加奈太、水銀は西班牙及び伊太利といふやうに獨專的に限られてゐる。

終局に於いて世界の鑛物を所有する者は何人であるかとの問題は、驚愕してゐる全世界の前には今は判然としていない。

この問題が遅々として暫くは形狀を鮮明にしてこない限り、該問題を一般大衆に眞の國家的及び國際的關心事のひととして意識させるには——唯新しい需要に應じ得る資源地の分布が制限されてゐること、而かも此等資源の專政的支配が急速に達せられんとしてゐること等の新しい洞察を以つてせねばならない。

如何なる政治的單位又は合同政策が世界的商業編制を支配するであらうか？ 商業上の協力

に於いて更に一步を踏み出すことを躊躇せしめるものは、實にこの問題だけであるが、之に就ては後章に於いて討議する。

或る程度までの商業的並びに政治的協同は、他の原料、例へばゴム・珈琲・穀類等に就ても行はれんとする途上にあるが根本的の相違がある。

鑛物は代用物を以つて換えられぬ資源であり、之を或る種の穀類が成長する場合に必須な還境條件と比較すると、多少量も不足であり且つ不規則に地球上の一地方に局限されてゐる傾きがある。(未完)

新著紹介

○日本經濟地理

コンスタンチン・ポプコ著

松崎敏太郎譯 叢文閣發行 定價二圓五十錢

菊版四百六十五頁譯文流暢である、外人の日本研究ことに經濟方面に於ける批判は最近大に進んでロシア、又はドイツ

の地理學者の研究題目となつた、本書もその一つであつて、第一篇日本の自然資源と住民第二篇日本の經濟的區劃はその前篇であり所論妥當である。さうして第三篇日本國民經濟とその最重要部門の地理に主力をつくしてゐるが廣汎な日本の産業各部門にわたるが故に概説にすぎない、中に著者が最も力をつくしたところは日本の労働問題であるらしい、世界大戦後の數年間に於ける労働者階級と農民の著しい貧困化が見られることを主張しその結果日本の人口の大部分の購買能力の減退と國內市場包容力の狹隘が現はれたことを指摘し工業原料に於ても日本はその多くを外國からの原料の輸入に依存してゐる、日本の特産茶の如きも今日ではセイロン茶のやうに十日目ごとに摘採される地に比べて、静岡では年四回辛じて茶がつめる位で其品質はよくないとか、砂糖工業では臺灣の一戸當り甘蔗收穫高は三八擔、ジャワでは一五九擔、布哇では一八一ピコル(一九二〇)であつたが今は一二四擔(一九二九)になつたけれども、同年に瓜哇では二四九擔をとつた。臺灣の收穫高は絶對額に於て自己の競争者から立ちおくれであるといふやうなこと、日本の冶金工業が著しく低下してゐるといふことなどが細論されてゐる。主として一九二九年迄の統計によつて立論されてゐる。しかし時代はかはる、日本はいつまでも一九二九年ではない。現に瓜哇の砂糖は、臺灣糖に壓迫されてしまつて目下不振である。農民の貧困も著者の云ふ道であるかもしれないが、事實は左程に窮迫はし

てゐない。更生農村も多くなつた。蓋し經濟地理といふものは動的であるから、時の経過によつて改良される。我等は本書から五年前の日本經濟の一方的な概観をすることが出来るに止まる。以て他山の石として參考に供すると共に、多少し動かない經濟地理の見透しといふものを聞きたいものだと思ふ。(藤田)

○日本工業論

ジョン・オーチャード著 經濟情勢研究
會譯 叢文閣發行 定價二圓

本書もやはり前書と同種類の日本研究の一つである、日本の過去の歴史をみて、日本産業の分散性をのべ明治以後の工業化に入り、日本の四大工業の中心について其發達をのべ特に日本に於て今日猶生産は封建時代に於けると同じく小規模な仕事場に行はれることを指摘し綿絲紡績と鑄鋼の二部門のみが大規模な工場組織で他はいづれも、その工業過程の中に家内の仕事場がある、これは極めて活力に富む生産單位である、製糸工場中心たる諏訪地方で約三千の農民は家内に於て絲を繰つた、京都の織物の大部分は家内の的でしかも分業的の工作で成立つてゐる。名古屋でも瀬戸でも大阪でも神戸でも多くの生産品は大工場でなくて近傍の住宅でなされる。かうした日本工業の特色は大企業及ばない收縮適應性をもつ、さうして世界大戦後の不況を論じ、日本では資本が不足である技術が不熟練である。科學がたらぬ。組織がわるい。原料は外國に依存する。水力エネルギーも少い。鐵、石炭、石油、

いづれも不足する。満洲の鐵も品位不良だ。だから外國貿易はいつも輸入超過で、毎年平均三億六千五百萬圓の入超過、國際支拂は毎年一億二百六十萬圓に上り、一八七〇年以來二十五億の外債を募集した。日本の工業はさう發展はしないだらう。しかし日本の大工業産出の紡績や器械などの外に雜貨がある、其の輸出は西歐風の工場工業でなく、むしろ家内工業の發展を助長すると共に、日本の外國貿易の確固たる發展をもたらすであらうとのべてゐる。思ふに日本工業の特色たる小企業の利益について、更らに深刻な批判が加へらるべきではなからうか。一九二九年迄の統計で、日本の工業は前途悲觀といつてしまふのも正當な見解でないと同時に、日本産業の分散と小企業の發展については更らに細説し吟味されなくてはなるまい。(藤田)

○日本國勢圖會

昭和十年版 矢野恒太、白崎彦一共編
國勢社發行 定價一圓

前二書よりも日本の經濟地理を明快に説明指導してゐるのは矢野氏の日本國勢圖會である。彼此参照することによつて外人の見た日本の産業と、日本人の自ら作つた産業概觀とがいかにかがうかといふことが明になる、定價一圓は廉賣である。我等は國勢社に感謝しなくてはならぬ。前の方は讀まないでも、こちらは毎年必讀をすゝめる。(藤田)

○日滿支經濟論

猪谷善一著 言海書房發行 定價二圓
日滿支三國の經濟關係を論じたものである。滿洲農業の危

機、農村匠數の國情等は注意してよむべき要點であると信じ複雑な三國關係を通覽する良い參考書であることを認める。

○奈良觀光市街地圖

藤田博介著 大和史蹟研究會發行 定價三十錢

新聞紙二倍大の四版に奈良の鳥瞰圖をつくつたもので、奈良師範の堀井君の助力になつた、裏面に寫眞や、觀光の案内記がある。(藤田)

雜報

○神戸市奥平野の鏡石と斷層

神戸市奥平野梅元町

の北部、角閃花崗岩と奥平野の低地との境界に於て相當大規模なる鏡石がある。而は多少風化せるも極めて平滑に磨かれ而全部に互りて擦痕がある。而は正しく磁針の東西に走り、南方に向ひて六十度の傾斜を有する。平面の露出部は東西約六米、傾斜に沿ひて約五米であつて、東端は崩壞してゐる。西端は約四十糎の厚さを有する斷層粘土らしきものが保存さる。

この鏡石から約二—三十米位東は瀬谷(一萬分ノ一地形圖中の瀬谷は誤記)と呼ぶ小溪で、千鳥ヶ瀧といふ瀑布を懸ける。この瀧の下に至るまで鏡石は追跡し得るのである。